

「主イエスと出会う」

(ヨハネによる福音書14:15-21)

今週も先週に引き続き、ヨハネの手紙とヨハネによる福音書が読まれました。ヨハネの手紙の背景については、先週触れましたが、今日はまず、ヨハネの手紙の書き出しから見てみましょう。

「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目を見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち命の言について。」

このようにヨハネの手紙は始まります。しかし、実はこの記述は不思議というか奇妙と言うか、現実的には考えづらいことなのです。というのは、これらヨハネ文書が記されたのは、主イエスが昇天されてから数十年後とされていますから、著者は主イエスに直接会ったことがないからです。にもかかわらず、著者たちはたしかに命の言なる主イエスと出会い、触れ、その声を聴いたと語っているのです。このことは、ヨハネによる福音書などのいわゆるヨハネ文書を記した人々にとっては、確かに、実際に経験したことだったのです。まさにヨハネの手紙の出だしに宣言されているように、著者らの実体験、信仰の体験によって、「時を隔てても、主イエスとの出会いは起こるのだ」ということをヨハネ文書は繰り返しわたしたちに語りかけるのです。しかし、どうして「主イエスと今、出会う」などということことが起こりえるのでしょうか。

ヨハネ文書が繰り返し語ることはこうです。主イエスとわたしたち一人ひとりが互いの内にとどまり合う時、わたしたちは主イエスと今なお出会い、触れ、その声を聴くこ

とができる。そのために、主イエスはわたしたちの内にすでにとどまってくださっている。だから、わたしたちもその主イエスにとどまるなら、時空を超えて主イエスと出会う。これが、ヨハネ文書が繰り返し語ることです。今日の福音書で主イエスが「あなた方がわたしの内におり、わたしもあなたがたの内にいる」と仰っている通りです。では、主イエスがわたしたちの内にとどまる、とはどういうことなのでしょうか。

主イエスは「命の言」ですから、たとえば、それはみ言葉としてわたしたちの内に宿る、ということだといえます。幼いころに聴いたみ言葉が長い年月を経てよみがえり、信仰へと導くということがあります。それはまさに、み言葉なる主イエスが、「わたしの内」にとどまり続けてくださっていたからに他なりません。そしてこの場合、わたしたちが主イエスにとどまるということは、わたしたちもみ言葉にとどまる、ということです。意味が分からんとポイツと捨ててしまうのではなく、心にとどめ、そのみ言葉との交わりに身をおくことです。それが、主イエスにとどまる、ということです。そうして、わたしたちはみ言葉を通して、主イエスと互いにとどまり合い、やり取りをすることで「主イエスと出会う」ということが今、起こるのです。このことはみ言葉を頭で理解する、ということにとどまるということではありません。魂も肉体も全部含めた全人格的な交わりをみ言葉とすることです。時に泣き、時に喜ぶ、そういう人生のあらゆる場面をみ言葉と共にすること。まるで人生の伴侶のごとく、生活のなかで、生きているあらゆる場面でみ言葉と交わる。これが主イエスがわたしたちの内にとどまり、わたしたちも主イエスの内にとどまる、ということです。そのとき、わたしたちはまさ

に直接耳で聞き、手で触れるほどに、主イエスとの出会いを経験するのです。

主イエスがわたしたちの内にとどまる、ということはまた、わたしたちにおいては聖餐、パンとぶどう酒によるといえます。主イエスはパンとぶどう酒によってまさにわたしたち一人ひとりの体の一部となってくださり、わたしたちに宿ってくださるのです。知性も理性も超えて、この肉体そのものになってくださることによって、わたしたちを主イエスと共にある命へと体ごと変えてくださるのです。主イエスはこうして、み言葉によって、そして聖餐によってすでにわたしたちのうちに宿り、わたしたちは主イエスとの出会いへと招かれているのです。今、礼拝が休止中で聖餐式をおささげすることはできません。聖餐に与ることができないということは、このことのゆえに、とてもツライことです。しかし、物理的にパンとぶどう酒をいただくことはできずとも、主イエスはわたしたちをみ言葉を通して、またあらゆる物を通して養い、わたしたちの身体ごと養ってくださることを感じたいと思います。日々の糧を神に感謝していただく時、それはすなわち、神からの命の糧、主イエスが内に入ってくくださる聖なる食事へと変えられるはずです。

なによりもわたしたちはその主イエスとの交わりにおいて、主イエスの愛をいただいているのです。主イエスはわたしたちに掟を与えました。その掟とは、「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」というものでした。この掟を守る、つまり互いに愛し合って生きることは、わたしたちが自分の力で、たとえば何か修行を積んでなしうることはありません。わたしたちが

望むよりも先に主イエスがわたしたちの内にとどまり、わたしたちに愛を注いでくださるからこそ、わたしたちは愛を知ります。その愛をいただくからこそ、わたしたちは愛を知るものとして、今度はその愛を誰かに届けることができる。互いに愛し合って生きることができるのです。主イエスはわたしたち一人ひとりの内にとどまっておられる。それは他でもない、わたしたちに愛を届けるためです。そして、その愛を互いに持ち合い、互いに愛し合って人が生きるためです。

主イエスがわたしたちの内にとどまり、わたしたちも主イエスにとどまる。そこにおいてわたしたちは今なお主イエスと出会い、交わり、その交わりにおいて愛をいただき、愛に生きるものとされる。このことを信じるために、わたしたちにはすでに聖霊が注がれています。今日の福音で、主イエスが約束してくださった「弁護者」が、わたしたちにいつも伴い、主イエスの存在をわたしたちに教えてください。「弁護者」とは「並走者」とか「伴走者」訳すことができる言葉で、「聖霊」のことです。聖霊がわたしたちがどこにいても並走してくださり、主イエスとの交わりへと導き続けてくださいます。少し自分の胸に手を当てて、この聖霊が確かに宿っていることを感じましょう。そして、わたしたちが主イエスとの交わりに生き、互いに愛し合って生きることができますよう願い、求めながらこの礼拝をおささげしてまいりましょう。